

やすらぎ金沢教室の成果と課題 (2)

The Effect and Subject (2)
of Yasuragi-Kanazawa Adaptation Guidance Room.

高 賢 一
TAKA Kenichi

I はじめに

前回の論集40巻第2号において、平成16年4月に新設された不登校の子どもたちを支援する「やすらぎ金沢教室」(以下金沢教室と称する)の成果と課題(16年度分)について明らかにした。第3号においては、平成17年度の成果と課題を明らかにしたい。適応指導教室は、不登校問題の有効な対応策の一つとして位置づけられ、これまで主として義務教育の不登校の子どもたちの自立・発達や学校復帰等を支援してきた。このような状況の中で、平成18年8月末の時点で石川県には七つの県立適応指導教室¹⁾が設置され、小・中学生はもちろんのこと、不登校の高校生を正式な通室生として受け入れ、学校復帰はもちろんのこと、進路ガイダンス、学習支援、自立・発達等の支援を行っている。全国的に見ても、義務教育ではない高等学校の不登校生徒を正式な通室生として受け入れている適応指導教室は皆無に等しいことから、石川県の取り組みが注目されている。本稿では、試行錯誤を繰り返した平成16年度の高沢教室の取り組みを踏まえながら、ようやく軌道に乗り出した17年度の当教室の成果と課題を明らかにし、高校生を受け入れる適応指導教室の在り方に一石を投じてみたい。

II 石川県における高校生を受け入れる 県立適応指導教室

石川県においては、平成18年8月末の段階で、不登校の高校生を対象にした県立の適応指導教室「やすらぎ教室」が7教室設置されている。一方、市町立の適応指導教室であるが、輪島市、七尾市、かほく市、内灘町、金沢市(2教室)、野々市町、白山市、小松市、加賀市に各1教室設置されており、それぞれの地区をカバーしている。七つのやすらぎ教室を子どもの対象別にみると、小・中・高校生対象のものが4教室、高校生のみ対象のものが3教室となっている。市町立の適応指導教室と重複する部分もあるが、小・中・高校生を対象にしている県立の適応指導教室では、市町立の適応指導教室になじめない子どもたち、あるいは適応指導教室が設置されていない市町立の子どもたちを受け入れている。

県内の七つのやすらぎ教室は、奥能登地区、中能登地区、口能登地区、金沢地区、小松地区、加賀地区と、それぞれの地区をカバーしている。地域の実態に応じて、それぞれ独自の取り組みを行っている。第2号において明らかにしたように、不登校の数は激減したわけではないが、県立の適応指導教室の稼働率は決して高いとはいえない。その大きな理由としては、義務教育の子どもたちとは異なり、せっかく適応指導教室に通室しても出席扱いされないことがあげられる。出席扱いされないことを了解しつつも、敢えて通室する子どもたちは何を求めて通室して来るのか興味深いところである。

不登校の高校生の場合、義務教育の子どもたちと大きく異なる点は、単位認定の問題である。不登校により、当該校が定める各教科の欠課時数を超過してしまうことが多いため、単位不認定となったり、原級留置(留年)になってしまうケースもみられる。最悪の場合、自ら外界との接触を遮断し、ひきこもってしまう場合もある。石川県の未来を担う健全な高校生を育てたいという強い願いからか、石川県は学校のいじめ問題や不登校問題には極めて積極的に取り組んでいる。外部の専門家であるスクールカウンセラーの導入はもちろんのこと、校内の教育相談体制の充実、校内研修会の充実、石川県独自の「カウンセラー教員養成講座」²⁾の実施による教師カウンセラーの育成、適応指導教室の充実など、学校教育相談の推進と定着に対してはかなりの力の入れようである。

III やすらぎ金沢教室の実践

1. 一律に学校復帰を目標としない多様化した高校生

平成18年3月末における通室生は23人、そのうち中学生が3人、高校生19人、その他1人であった。中学生3人のうち、1人は高校進学、1人は専門学校進学、もう1人は当教室に継続通室している。高校生の内訳は、大学進学1人、高校卒業1人、定時制高校等への進路変更4人、在籍校への学校復帰10人、通信制高校への進路変更3人であった。とりわけ入学した高校にうまく適応できず、当教室に通室しながら再出発を模索し、定時制高校や通信制高校に進路変更した子どもたちは予想以上に活躍し、当教

室に入室した頃の面影がないくらいに元気になっている。在籍校に復帰させることを主な目標としてきたが、学校復帰した生徒はもちろんのこと、進路変更した生徒の適応・成長に驚かされる。

設立の経緯や運営のガイドライン等については、第2号において明示したが、金沢教室は、石川県内の七つのやすらぎ教室の中心的な役割を担うことが期待されている。小・中学生はもちろんのこと、高校生も受け入れる金沢教室は、とりわけ金沢市内の公立・私立高校25校、近隣の公立高校5校を中心として、各学校の教育相談係、ホームルーム担任、当該校の不登校に陥っている生徒や保護者などを支援している。

当教室は、次のような目標を掲げ、実効性のある実践活動に取り組んできた。①通室する子どもの在籍校や保護者との連携を密にする、②スタッフ間の連携を緊密にし、通室生に対する支援活動を調整する、③医療機関や児童相談所などの関係専門機関との連携をはかる、④通室生の希望や実情に応じた行事の計画・実施をはかる、⑤他の適応指導教室との情報交換や連絡を緊密にする、⑥学習支援ボランティアの活用を推進する、である。

一方、当教室に通室する高校生は、必ずしも学校復帰のみを目標に掲げているわけではないことから、子どもたちの目標に応じた支援活動を行う必要があった。そこで、次のように分類して、きめ細かく支援活動を行った。①休学しながら在籍校に復学をめざす生徒、②学校と通室を並行しながら学校復帰を模索する生徒、③在籍校との折り合いが悪く、他校転入学をめざす生徒、④欠時数が規定を超過し、進級が絶望的になっている生徒、⑤精神疾患等により、治療と並行しながら通室する生徒、⑥その他(①から⑥に属さない生徒)、の6タイプである。

適応指導教室では、不登校の子どもたちを学校復帰させることが最終目標なのかもしれないが、どのようなプロセスを経て学校復帰に至ったのか、そのプロセスが極めて重要である。たとえ学校復帰に至らない場合であっても、子どもたちの生きる力に結びつくなど、適応指導教室での生活がその後の生き方に大きく影響を及ぼすことについては、2号で明らかにした。何人学校復帰できたかということが、適応指導教室としての成果の指標になることは否めないが、義務教育ではない高校の子どもたちも預かる当教室としては、とりわけ多様化・複雑化した問題を抱えた高校生を受け入れることから、必ずしも学校復帰に結びつくとは限らないという実情がある。

2. 前年度の実践を拡充・深化させた取り組み

平成16年度は、当教室を新設させ、基盤づくりに全力が注がれたため、対外的に働きかける活動に力を注ぐこ

とはあまりできなかった。17年度は、前年度の実践を拡充・深化する形で積極的に取り組んだが、主な取り組みは以下の通りである。

- (1) 定期的なスタッフ会議開催による支援体制の見直し(初)
- (2) 主任を中心とした組織的な支援体制の充実(初)
- (3) 学校訪問や「金沢通信」の発行による啓発活動(初)
- (4) やすらぎ六教室の合同合宿(白山青年の家)実施(初)

《実践例：白山青年の家での合同体験合宿の感想文》

「金沢教室さんの呼びかけで、合同体験合宿に参加することができ、深く感謝しております。通室生の参加は1人でしたが、スタッフ2名も参加することができて喜んでおります。この二日間、いろいろなことがあったけど、とても楽しく過ごすことができてよかったです。小松教室は、小松市のふれあい教室と合同登山体験やもちつき体験等を通じ、縦のつながりの中での交流は従来から行っておりましたが、高校生同士の横の交流は初めてということで、たいへんに意味深いものがあったように思われます。同じバスに乗り、体育館でのスポーツを通じた交流、夜のゲーム交流、草木染め体験、そして白山ひめ神社への参拝等、天候に恵まれ多彩な活動を体験することができました。

集団の中で自分を見つめ直す絶好の機会となり、当初の目的が十分に果たされたと思います。また、通室する子どもたちのすばらしい感性の一面もかいま見ることができました。我々スタッフも、交流を通じて通室生以上に得るものが大きかったように思います。先導いただいた金沢教室の高先生をはじめ、スタッフの方や研修員の先生方、本当にお世話をおかけし、ありがとうございました。次の機会にも是非参加させていただきたいと思っております。」(小松教室指導員の感想より)

- (5) 外部専門3機関の講師を招いての合同研修会の実施(初)
- (6) 学校教員や保護者を対象とした医療相談会の実施(初)
- (7) 教室外の人とのふれあいや体験学習の工夫

《実践例：真冬のもの作り体験バス遠足》

「天候にも恵まれ、過去最高の参加率で臨んだものづくり体験バス遠足。昼食は、途中のコンビニで購入する機会を与えたり、現地での活動を子どもたちがその場で興味を持てたものに参加できる形をとったりなど、子どもたちにとって負担の少ない計画が良かったのだと思う。当日は、迷いに迷って一つの活動を選んだ子、午前、午後と意欲的に違う活動に取り組んだ子、友達の製作する様子を興味深そうにながめていた子など、さまざまだったが、どの子も満足そうな顔をしてバスに戻ってきたことが何よりも嬉しかった。」(スタッフA)

「今回の体験活動は、参加する子どもたちが何を体験するかを選ぶ楽しみがありましたので、興味をもって取り組むことができたのではないかと思います。他の子どもたちを思いやる心、体験活動を通して得られた自信、子どもたち同士のふれあい、他の子どもたちについての新しい発見など、ふだんの教室では得られないものが数多くあり、体験活動の意義を強く感じました。エネルギーのない子どもたちが、教室の外へ出て行くには相当な気力と勇気が必要ですが、いったん外に出ることができるようになれば、さまざまな体験活動にチャレンジしてほしいと思いました。」(スタッフ B)

(8) 研修員が研修成果を発表する合同研修会の開催 (初)

IV やすらぎ金沢教室の成果と課題

1. 成果

平成 16 年 4 月に新設された「やすらぎ金沢教室」は、石川県教育センターに設置されていた適応指導教室「ヒューマンセンター」の運営方法を踏襲したが、指導員や研修員が常駐する独立した適応指導教室となったため、ヒューマンセンターの運営方法を見直す必要に迫られた。最初の 1 年間は、試行錯誤を繰り返しながら子どもに対するより効果的な支援方法を模索することになるが、こうした取り組みを一つ一つ吟味したうえで当教室独自の運営方法を構築し、2 年目のスタートを切った。

17 年度の取り組みについては前述の通りであるが、前年度の実践を踏まえたうえで、それを拡充・深化する形で取り組んだ。その結果、いくつかの成果が得られたので整理したい。

(1) 子どもに対する支援体制・支援方法が充実した

前年度にはなかった主任制度を位置づけるとともに、室長や副室長も交えた定例のスタッフ会議を開催することにより、子どもたちに対する支援方法がより洗練され、より効果的な支援体制が構築された。その結果、外部専門機関との連携、在籍校との連携、保護者との連携もよりスムーズになり、預かった教室が子どもの支援を一手に引き受けるのではなく、それぞれの立場から協働して子どもたちを支援する体制にシフトすることができるようになった。エネルギーが低くて、外へ出ることもままならず、対人コミュニケーションが全くとれなかった子ども、エネルギーはあるが、引きこもりに近い状態を続けてきたために、一方的なコミュニケーションしかとれず孤立してしまう子ども、周りに合わせ過ぎて疲れきってしまう子ども、偏った価値観や強い自我のため、周りの子どもたちと協調できない子どもなど、一律の支援方法ではとても対応しきれものではない。子どもの担当指導員が、その子どもに合った支援目標や支援方法を

提示し、研修員がそうした方法で関わってみる。プラスであれマイナスであれ、子どもに何か変化があれば、その都度子どもの様子を観察したり、面談しながら支援していく。帰りのスタッフミーティングで、子どもの状況に関する情報交換を行い、支援目標や支援方法を変えていく場合もある。このようなことを繰り返しながら、大局的な見地から子どもたちを見守り支援したことで、子どもたちは確実に変化していった。

(2) 金沢教室の存在や役割をアピールすることができた

16 年度は、金沢教室の体制づくりと通室する子どもたちや保護者の支援等に迫られ、対外的な働きかけは今一つであったが、17 年度は、教室内の支援体制はもちろんのこと、対外的な働きかけも積極的に取り組んだ。前述のように、金沢市内および周辺地区の高校へ毎月一回訪問し、不登校に関する情報交換、毎月一回発行する「やすらぎ金沢通信」の配付などを精力的に取り組んだ結果、当教室に対する知名度や信頼感が得られるようになった。このような取り組みが功を奏したものと思われるが、相談件数(括弧内は 16 年度)だけを見ても、入室相談が 967 (487) 件、出張相談が 223 (32) 件、電話相談が 790 (383) 件と急増している。また、入室してくる子どもの数、とりわけ高校生が増加した。新聞社からの熱心な取材により、金沢教室が大きく報道され、知名度が高まった。当教室の取り組みに関心を抱いた他県の教育機関や適応指導教室等からの訪問もみられるなど、一躍脚光を浴びることになるが、おごることなく子どもたちへの支援については妥協を許さなかった。

(3) 広域・地域 SSC 事業に積極的に取り組むことができた

金沢教室は、六つのやすらぎ教室の中心的役割を担うことから、広域 SSC 事業を担当することになっている。具体的な主な取り組みとしては、他の適応指導教室とのネットワーク作り、外部専門機関や教育機関との連携、体験的プログラムにおける民間講師の依頼、医療相談会の開催、研修員の地区別合同研修会の開催、県立適応指導教室の合同合宿、関係機関に対する情報提供などである。金沢教室は、単なる教育支援施設や相談機関としての役割のみならず、石川県全体のネットワーク作りの中枢的役割も担っていることが知られるようになった。とりわけ合同合宿や地区別合同研修などは、子どもたちの成長や研修員の資質向上に大きな役割を果たすことができた。

一方、地域 SSC 事業としては、地域内の学校訪問、地域内の市町立の適応指導教室や児童相談所や病院、心の健康センターや県立発達障害支援センター等の外部専門機関との連携、学習支援ボランティアやスーパーバイザーなどの外部人材の活用、不登校の子どもを抱える親の

会（年間7回）の開催などである。3人のボランティア学生（金沢大学）による学習支援は、基礎学力の向上はもちろんのこと、人間的なふれあいを通して子どもの情感が形成されたことなどは特筆に値するものである。臨床心理士による当教室の子ども支援に関するコンサルテーションにより、より効果的な子ども支援が可能になったことがあげられる。

《子どもたちの成長・変化を物語る感想文》

一年間の締めくくりとして、当教室に通室した子どもたちに感想文を書いてもらったが、この感想文が子どもたちの成長や変化を如実に物語っており、金沢教室の何物にも替えがたい貴重な財産となっている。

「昨年度に引き続き、今年度もやすらぎ教室にお世話になりました。今年度は、大学受験を控えていて、精神的にとっても不安定でした。しかし、先生方や仲間たちに支えられ、迷惑をかけたこともありましたが、無事に大学に合格することができました。やすらぎの先生方には本当にお世話になりました。ありがとうございました」

(Aくん)

「9月にこの教室に来ましたが、その頃との変化が二つあります。一つ目は、学校に対する気持ちです。学校というのは仕方なく行くところだと思っていたのですが、現在登校していない自分をふりかえてみると、充実のなさ、生活リズムの乱れなど、自分にとってプラスにならないものばかりでした。ふと周りを見れば、楽しそうな高校生を目にします。『今まで、私は何をしていたのだろうか?』と疑問に思うと同時に、寂しさすらこみ上げてきました。そして、『学校へ行きたい、学校で楽しみたい』と思いました。二つ目は、生きることに對する気持ちです。これまでは『いつ死んでもいい』と思っていたのですが、感動的な体験が少ないままにだらだらした生活を送っているうちに、『このままでは絶対に死にたくない』と思うようになってきました。私は、これからは精一杯がんばって生きていこうと思います。それは、自分のためだからです。やすらぎ金沢教室の先生方、そして通室生の皆さん、ほんとうにありがとうございました」(Bさん)

「もしやすらぎ教室がなかったら、たぶん今の自分はなかったと思う。きっと家に引きこもっていただろう。小学校低学年からひどいイジメにあってきたので、人を信じられなくなった。だから、人づきあいは苦手だし、あまり興味もわかない。でも、やすらぎ教室に来てから信じられる友達や先生にめぐりあうことができた。学校復帰をするために、学生ボランティアの人や先生に助けられて、中学1年の勉強からやり直した。なんとか中3の

基礎勉強まで終わることができた。やすらぎ教室で学力をとり戻すことができたし、人づきあいにも興味を持てるようになった。そう簡単に人を信じることはできないけど、ここで人を信じることの大切さを教えられた。最初は、学力を取り戻すためだけの教室と考えていたが、いろいろなものを身につけることができたと思う。お世話になった先生方、そして新しくできた友達に感謝している。この教室に来て、本当に良かったと思う」(Cくん)

「自分は、高校を中退してから一年間、何をするわけでもなく、ただ家で過ごすだけの生活を続けていました。この一年間は、本当に自分にとって辛い一年間でした。何もすることがなくなった時、人間はそこで終わりなのだと痛感させられました。そんな時に、父親にこの「やすらぎ教室」の存在を教えてもらいました。初めは全く興味がなく、気にも留めていませんでした。しかし、このままでは自分はこの先どうになってしまうのだろうと不安にかられる日々を送るよりは、少しでも前を向いた方がいいと思い、思い切ってやすらぎ教室へ行くことにしました。行くまでは、学校と同じような場所なのかと思っていましたが、先生方はとても優しく接して下さり、通室生の人も自分と同じような境遇に置かれた人達なので、とても親しみが持てました。約三か月通室して、今思うことは、やはりこのやすらぎに来て良かったということです。たくさんの仲間と出会えて、人とのかかわりも増えました。自分を最後まで支えて下さった先生方にも心からお礼を言いたいです。本当にありがとうございました。(Dくん)

2. 課題

17年度は、16年度に残された課題について少しでもクリアできるように努力したが、長期的な課題については粘り強く取り組んでいくしかないと思われる。17年度に残された課題は以下の通りである。

- (1) 地域内に中核都市金沢を含んでいることから、金沢市の適応指導教室（そだち教室）との連携に工夫が必要である。

金沢市には、北部と南部に適応指導教室が2教室設置されているが、石川県内の適応指導教室の中では、施設やスタッフの充実ぶり、通室生の数等が突出している。ただし、義務教育の子どもたちを受け入れるという点では当教室と重なる部分はあるが、高校生の受け入れは当教室のみであり、そだち教室に通室していた子どもが当教室に通室してくる場合もある。

(2) 小学校・中学校時代から不登校を引きずっている子どもに対して、支援の在り方を工夫する必要がある。

長い間不登校を引きずっていたり、学校よりも適応指導教室に通室していた期間が長い子どもが通室してくるケースがあり、一通りの対応では通用しないことが多い。適応指導教室に慣れすぎていることで、初めて通室してくる子どもたちにプラスとマイナスの影響を及ぼすため、プラスの部分を生かすような形で、このような子どもたちに対する支援の在り方をさらに工夫する必要がある。

(3) 適応指導教室においては、行事や体験活動の意義が極めて大きい、行事や体験活動に関する企画・運営にさらなる創意や工夫が必要である。

子どもたち自らが行事や体験活動を企画・運営する形が最も理想的であるが、適応指導教室に通室する子どもは自分のことで精一杯であることが多く、どちらかというスタッフ主導の企画・運営になりがちである。それでも、子どもたちの意見や要望を十分取り入れて行事を立案したり、いくつかのメニューを準備して子ども自身に選択させる方法をとるなどの工夫をしてきたが、さらなる工夫をすれば理想的な形に近づけるものと思われる。

[資料 1]

— 平成 17 年度カウンセラー教員研修講座研修員の感想 —

やすらぎ金沢教室での 11 か月の研修は、驚きと迷いの連続だったように思います。その中で、多くのことを学ばせていただきました。金沢教室では、子どもの現在の状態、何をどのように考えているか、そして教室での時間の過ごし方についての本人の自己決定など、あらゆることをまず受け入れることからスタートしないと始まらないのですが、これは本当に難しいことでした。私にとって、一番の「修行」だったように思います。

しかし、子どもたちは、受け入れられていると感じることができれば、自らについて語り始めることができ、自らについて考えるようになったように思います。そして、そのことが成長していく原動力になっていくのだなあということがわかりました。そして、常に子どものいいところに目を向け、「あれもこれもできていない」ではなく、「これもできるようになったし、ここも変化している」とリソースを見つけ、勇気づけ続けることの大切さも学びました。

また、これまでは、目の前のクラスの子どものことだけしか見えていなかった私ですが、不登校というのは、その子その子の生き方の問題につながり、また、社会的にも大きな影響があることなのだとわかりました。学校に帰ったら、この研修で学んだことを少しでも生かしていかなけれ

ばいけないと思っています。いつも温かく見守りつつ、いろいろと教えて下さった指導員の方々や研修員の方々、そして通室の子どもたち、本当にありがとうございました。

(通年研修員)

私がやすらぎに来て、早くも半年が経ちました。初めての 2 か月ほどは勝手がわからず、戸惑うことが多くありました。特に、通室生の人たちとの接し方が学校現場とかなり違うので、どうしてもぎこちない接し方になってしまいました。ただ、3 か月ほど経って、通室生の方から声をかけてもらえるようになり、だんだんと自然な交流ができるようになりました。そんな風に通室生のことが分かるようになってくると、今度は一人一人が抱えている問題の大きさが認識できると同時に、戸惑ってしまう自分がありました。

そんなわけで、この半年間は戸惑いの連続であり、人間を理解することの難しさを体験した期間でした。最初の 1 か月研修では、学校カウンセリングの基本は、「受容」「共感」「指導」であると教わりましたが、この半年ではとても「指導」までは行かず、せいぜい「共感」までできたかなというところだと思います。とにかく、私にとって貴重な経験ができました。これも、ひとえに未熟な私を支えて下さったスタッフの先生方のおかげだと感謝いたしております。最後になりますが、通室生の方々の今後のご活躍を祈って結びの言葉とさせていただきます。(半年研修員)

[資料 2]

— 平成 17 年度やすらぎ金沢教室活動報告書の編集後記 —

平成 16 年 3 月をもって石川県教育センターが設置していた適応指導教室「ヒューマンセンター」が廃止され、同年 4 月に県立金沢中央高校の敷地内（旧県立看護学校の跡地）に、新たに不登校の小・中・高校生を対象にした「やすらぎ金沢教室」が開室され、満二年を迎えます。廃校となった旧看護専門学校の校舎を活用することになったため、建物が古くて見劣りの感は否めませんが、ヒューマンセンターに比べますと交通の便が格段に向上し、スタッフも充実されました。適応指導教室の名称も「教育支援センター」に改称されつつありますが、名称の変更に伴って、これまでの適応指導教室のあり方についても再検討する必要があるかと思われます。

石川県内には、六つのやすらぎ教室（県立適応指導教室）が設置されたことになりましたが、とりわけ不登校の高校生を正式な通室生として受け入れている適応指導教室を六つも設置している自治体は全国的にも極めてめずらしく、不登校の子どもたちを積極的に支援しようとする石川県の取り組みが注目されています。このような中で、金沢教室は、石川県の中でも金沢地区と周辺地区に多くの小・中・高校

が集中していることから、とりわけこうした地区の学校の不登校の子どもたちや保護者の方々を支援しております。金沢地区には、金沢市が設置している適応指導教室「そだち」が2教室あり、管内の不登校の小・中学生を支援しておりますが、そだちを利用しにくい子どもたち、適応指導教室を設置していない津幡町やかほく市の子どもたち、そして不登校の高校生につきましては、金沢教室が支援する形をとっております。

金沢教室は、県教育センターが設置していた適応指導教室「ヒューマンセンター」を引き継ぐ形となったため、基本的にはその運営要綱を踏襲しました。しかし、単独の教室として運営するにあたり、いくつかの課題が浮上したため、試行錯誤を繰り返しながら当教室独自の運営方針を模索いたしました。3月現在で20名近くの通室生を受け入れましたが、スタッフや学習支援ボランティア等の懸命の努力により、子どもたちの学校復帰や進路変更等を実現しつつあり、4月よりそれぞれに新たなスタートを切ろうとしております。子どもたちの感想文を再度お読みになればおわかりのように、ゆっくりではありま

すが、当教室での生活を通して、子どもたちは少しずつ心を開き、着実にそして前向きに生きようと成長しております。

紆余曲折はありますが、通室を重ねるたびに子どもたちの表情が和らぎ、元気が出てくる様子を感じ取ることが出来ます。適応指導教室のスタッフでないと思いたい大きな喜びであります。子どもを甘やかしているのではないかなど、適応指導教室に対する批判もあるようですが、不登校の子どもたちの単なる安住の場所にとどまらず、通室する子どもたちがゆっくりと着実に成長していることをお伝えしたいと思えます。こうした成果が得られるのは、スタッフはもちろんのこと、学校現場から派遣された研修員の方々の努力と情熱、そして関係各位の皆様のご支援・ご協力の賜物であると確信いたしております。どうか、今後も引き続き不登校の子どもたち、そしてそれを支える教育支援センター（適応指導教室）に温かいご支援を賜りますようお願いいたします。

（やすらぎ金沢教室主任：高）

【註】

- 1) 平成18年8月下旬、奥能登（旧内浦町）に七番目の県立適応指導教室である「やすらぎ能登教室」が新設された。これまで穴水町に「やすらぎ奥能登教室」が設置されていたが、名称が重なるため「やすらぎ穴水教室」に名称変更した。どちらの教室も不登校の小・中・高校生を対象とするものであるが、穴水以北の能登鉄道が廃止されたことにより、交通の便がかなり悪くなったため、奥能登に二つの適応指導教室が設置されたものと推察される。能登教室は、主として珠洲市や能登町あたりを担当し、穴水教室は、輪島市の一部や穴水町あたりを担当する形となっている。
- 2) 平成9年4月より、不登校問題やいじめ問題等に対して専門的に対応できる、あるいは中心的な役割を担うカウンセラー教員の養成をめざすべく、石川県独自の「カウンセラー教員養成研修講座」が開講された。毎年エントリーされた石川県下の小・中・高校の教員十数名が内地留学（半年研修と1年研修がある）し、1か月間の県教育センターでの集中研修を終えた後、残りの5か月間または11か月間は、配属された県立か市町立の適応指導教室で臨床研修に臨むのである。この研修制度が開始されて約十年間、県立あるいは市町立の適応指導教室において臨床研修を終えたカウンセラー教員の数は確実に増え続け、関係領域で活躍している。こうし

た研修制度や適応指導教室の充実が、石川県内の学校の不登校問題の改善に大きく貢献しているといえよう。

【参考・引用文献】

1. 相馬誠一・花井正樹・倉淵泰佑編著『適応指導教室-よみがえる「登校拒否」の子どもたち-』, 学事出版, 1998年。
2. やすらぎ金沢教室編「平成16年度活動報告書」, 同教室編「平成17年度活動報告書」。
3. 高賢一「適応指導教室における理論と実践の統合に関する研究」, 上越教育経営研究会編『教育経営第10号』, 2004年, pp.69～78。
4. 高賢一「適応指導教室における効果的な支援方法に関する研究」, 日本学校教育相談学会編『学校教育相談研究第14号』, 2005年, pp.13～22。
5. 高賢一「適応指導教室における高校生の支援活動に関する研究」, 日本特別活動学会編『特別活動研究第14号』, 2006年, pp.57-65。
6. 高賢一「適応指導教室における子どもの支援方法の改善策に関する研究」, 金沢星稜大学第40巻第1号, 2006年, pp.17-25。
7. 高賢一「やすらぎ金沢教室の成果と課題(1)」, 金沢星稜大学第40巻第2号, 2006年, pp.35-41。